士道小説集

定価　八〇〇円

昭和四十七年七月　一　日　初版発行
昭和四十七年八月二十五日　二版発行

著者　山本周五郎

発行者　増田義彦

発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
TEL　〇三―(五六二)―四三一一
振替　東京三二六番　〒一〇四
関西支局　大阪市北区真砂町五三
書協ビル内
TEL　〇六―(三六三)―一七〇六
印刷　大日本印刷　製本　共文堂
乱丁、落丁の場合はお取り替いたします

0093―363171―3214
©K. Shimizu 1972

山本周五郎

士道小説集

実業之日本社

士道小説集

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松風の門……9
鼓（つづみ）くらべ……35
笠折半九郎……55
狐……87
夏草戦記……105
良人の鎧……141
さるすべり……163
愚鈍物語……185
勘弁記……209

おかよ……227
討九郎馳走……245
彩虹……267
初雷……301
解説……木村久邇典……335

装幀　村上美術

士道小説集

山本周五郎

松風の門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

その洞窟は谿谷にのぞむ断崖の上にあった。谷は深く、両岸にはかつて斧を入れたことのない森がみっしりと枝を差交わしているので、日光は真昼のほんのわずかのあいだ、それも弱々しく縞をなしてそっと射し込むだけであった。そのうえ少し遡ったところに大きな滝があり、そこから吹下りて来る飛沫が絶えず断崖を濡らし、樹々の枝葉にあとからあとからと水晶のような滴の珠を綴るので、盛夏の頃でも空気はひどく冷えていた、洞窟はその谷に向って開いていた。高さは八尺ほどで奥行は二十尺ほどしかなかったが、入口が東南に面しているためにかなり明るく、また比較的によく乾いている。里人たちはそれを「白狐の窟」と呼んでいた。そして其処へ近寄ると思わぬ災厄に遭うと云い伝えられていたし、そうでなくとも一番近い村里から五里に余る嶮しい道を攀登らなければならないので、その附近にはほとんど人の姿を見ることが無かった。

ある新秋の日、一人の若い武士が谿谷を遡って来てこの洞窟の前に立った。若いといっても三十にはなるであろう、輪郭の正しい切りそいだような頬と、やや眼尻の下った深い眼許がきわだっている。彼は大きく膨れた網の旅嚢を背負い、左手に厚く折畳んだ緋羅紗を抱えていた。どんなに困難な道だったか、高く秀でた額から衿首まで膏汗が流れていたし、草鞋も足袋も襤褸屑のように擦り切れていた。

「やはり、考えていたような場所だ」暫くのあいだ両岸の深い森と、断崖に支えられた底知れぬ

谿谷を覗いていたが、やがて背負って来た荷物を下ろしながら呟いた「此処なら邪魔をされずに済むだろう」彼は洞窟の中へ入って荷を解きだした。

その明る朝、まだ灰色の薄明が漸やくひろがり始めた時分、若い武士は既に起きて、洞窟の入口に近く静坐していた……骨太の逞しい足を半跏に組み、両手の指を組合せて軽く下腹に当て、半眼にした眸子でじっと壁面を瞶めたまま身動きもせず坐っていた。大滝の音は、音というより絶えざる震動となって谿谷に反響し、霧のように渦巻く飛沫は、ときたま颯と吹下りて来る風と共に、樹々の枝葉から滴となってばらばらと白雨の如く散り落ちた。……若い武士は直ぐに疲れた。

「ただ坐っているというだけでも困難なものだな」

彼はそう呟きながら立った。そして首を捻曲げたり肩を揺上げたり、両腕を振廻したりして、暫く筋肉の凝をほぐしてから、ふと思出したように旅嚢を引寄せ、乾した棗の実を二つ三つ取出して口へ入れた。

洞窟の入口は疎らに草で蔽われていて、その中に一寸ほどの深山竜胆が飛び飛びに可憐な花を咲かせていた。指尖ほどの小さな花ではあるが、光に透いて見える濃い紫が如何にも鮮かで、じめじめした暗鬱な周囲に美しい調和を与えている。そして昼なか、僅に日光の縞がこぼれかかる時になると何処からか一疋の蜥蜴がやって来て、その花蔭にじっと身を温めるのが見えた。若い武士がそれをみつけたのは、彼が其処へ来てから三日目のことであった。それから幾日も幾日も、

真昼のその時刻になるごとに、彼の眼は自然と其方へ惹かれ、かなり長いことその小さな生物の動作に気を奪られるのであった。季節はもう秋であった、そのうえ陽射の弱い空気の冷えたそのあたりでは他に仲間も無いであろう、おそらくその蜥蜴も越冬の穴へはいる時が来ているに違いない。まだ稚そうだし、背中には美しい縞を持っているが、動作も緩慢なうえにひどくもの憂げな眼つきをしていた。日光の縞が斑にこぼれて、深山竜胆の鮮かな紫を染める時になると、蜥蜴はどこからかそろそろと這出して来て、定ったように或る一本の花蔭に身を落着ける。円いつぶらな眼をうっとりと閉じ、長い尾尖を力無げに曲げ、僅な陽射しの下でじっと動かなくなるのだ。

「……はてな」ある日、若い武士は吃驚(びっくり)したように呟いた、「達磨はこんなことに気が付いたかしらん、蜥蜴などに気をとられたことがあるだろうか」

「……そうだ」暫くして彼は再び呟いた、「同じことだ、見ようと見まいと蜥蜴はやって来る、例え達磨が気をとられなかったとしても、やっぱり彼の側近くには蜥蜴が這い廻っていたに違いない」

若い武士の唇にはしずかな微笑が泛(うか)んだ。日は経っていった、彼の頬や顎は濃い髭で蔽われ、深い両眼は益々深く落窪んだ。いまでは静坐にも馴れて、半日あまりは身動きもせずに坐っていられる。食べ物は乾した棗の実と僅に干飯を嚙むだけである。夜になると緋羅紗に身を包んで、ごつごつした岩床の上にそのまま眠った。そしてある朝、冬の前触れの霜が洞穴の外いちめんに白々と結んだ。

二

寛文十年十月、伊予国宇和島の領地へ、藩主として初めて国入をした伊達大膳太夫宗利は、亡父秀宗の展墓を済ませるとすぐその翌日、鶴島城で家臣たちの引見を行った。宗利はこの宇和島で寛永七年に生れ、十一歳のとき江戸へ去ってからほとんど二十年ぶりの帰国である。亡き秀宗が就封するとき、祖父政宗から選ばれて来た十五人の老職と、五十七騎衆の人々が居並んでいる広間で、式は朝の八時から午近くまで掛った、午後は賜宴であったが、宗利は長く席にいないで去り、朽木大学と二人だけで庭へ出ていった。

朽木大学は宗利の傅で、もう五十九歳になり、宗利が去年家督すると共に参政となった。非常に口数の寡い小柄な老人で、宗利とは影の形に添う如く、いつも側去らず侍しているのだが、平常はほとんどいるかいないか分らぬという風の人柄であった。しかし傅としての彼がどんなに厳格であるか、事に対していかに身命を賭して掛るかということを宗利はよく知っていた。

二の曲輪まで来たとき、ふと宗利は見覚えのある草原の前で立止った。

「此処はあの時分よく跳ねまわって遊んだ処だな」

「お上がお眼を傷つけなされた場所でございます」

「そうだった」

今は視力を失った右の眼を押えながら、ふと宗利は遠い空をふり仰いだ。——誰も知らないと

とだ。彼が十歳の秋であった。その時分お相手として殿中に召出れた少年たちの中に、郡奉行の子で池藤小次郎というのがいた。宗利より一つ年下であったが、神童と云われた俊才で、学問にも武芸にもずばぬけた能力を持ち、ほとんど一家中の注目の的になっていた。

宗利は正直にいうと小次郎を嫉んだ、領主の子としての自分よりも、遥に多く人々の尊敬と嘆賞を集めている彼が憎かった。それでいながら、宗利は最も多く彼を相手に選んだ。小次郎にはどこかしらそういうような、人を惹つけるところがあったのである。江戸邸に移る前年の夏、宗利は彼に剣術の相手を命じた。彼等は二人きりでこの曲輪の草地へ出て来て、袋竹刀で烈しく打合った。体力に勝れていた宗利は、そのとき小次郎を思うさま叩き伏せてやる積だったが、相手は巧に鋭鋒を避けて逃げ廻った。宗利は苛だち、遂には法もなにも無く打掛っていった。小次郎は避けきれずとみたか、遽に構えをたて直して向って来たが、そのとき彼の袋竹刀の尖が強たかに宗利の右の眼を突いた。宗利は悲鳴をあげながら、両手で眼を押えて草地へ転げた、指のあいだから溢れ出る血が半面を染めた。いまでも宗利は歴々と覚えている。小次郎は白く乾いた唇をあけ、空洞のようになった眼を大きく瞠いたまま立竦んでいた。それは痴呆のような顔であった。日頃の俊敏な、いかにも犀利な表情はあとかたもなく消え、恐怖悔恨にうちのめされて、ほとんど白痴そのままの顔つきをしていた。

——黙っているんだぞ。宗利はそのとき彼に命じた。——転んで傷をしたことにして置くから、其方がしたということは口外してはならぬぞ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com